

際してはチベット譯俱舍論を参照したやうに述べてゐるが、このやうに誤りが多いのを見ると、その仕方は全く嚴密でないと言はねばならない。

四、所論の摘要　校訂者がその序論の中に與へてゐる俱舍論前三品の所説の摘要解説は、甚だしく誤りが多い。俱舍論のほんの初歩を知る者すらも冒さないであらうと思はれるやうな誤謬が幾つも見出され、校訂者は果して有部教義についてどの程度の理解をもつてゐるかとは疑はしめる程である。ごく甚だしい例をいくつか挙げて見れば、色蘊(rūpa-skandha)は五根・五境の外に五識と五つの(?)無表と意と法と意識とを含むとなし(六頁)、十八界中前五界は有漏無漏に通じ意・法・意識界は唯有漏であるとし(一一頁)、意根の對境は諸根諸境をも含めた一切法であるとし(二〇頁)、或ひは、無色界は五趣に含まれないとする(三五頁)。このやうな誤まりは、たとへば譯或ひはチベット譯の俱舍論本論を讀まなくとも、いまこのテキストに含まれてゐる俱舍論本頌と稱友釋の梵文を注意深く讀めば、決しておちいる筈がないと思は

れるのであつて、本文校訂者によつてこのやうな解説がなされてゐるのにむしろ奇異の感をいだかないではゐられない。

### ◇ 世親唯識の研究 上

結城 令聞著

(櫻部)

本書は、唯識思想の源流を探つて發表された會つての著者の勞作「リ見たる心意識論」唯識思想史」に續き、完成期の唯識學説の研究としてまとめられたものである。本書の構成は、資料論、歴史論、思想論の三部より成るが、ここに紹介する上巻は、資料論と歴史論とであり、下巻の思想論は未刊である。

第一部の資料論は、世親の唯識思想研究に關する必要な諸文獻の中、資料的に異論のある文獻についての吟味であつてここで著者は、(1)大乘莊嚴經論・顯揚聖教論・大乘百法明門論の撰述に關する異説を批判し、(2)眞諦三藏の翻譯にかかる轉識論、顯識論、三無性論の三部に對する字井博士等の從來の資料論へ再吟味を加へている。この中、轉識論を唯識三十頌の類本にして同本異譯にあらずとする

所説が、特に注目される。

第二部の歴史論は、世親の思想史的特殊の立場が、世親の論書に於いて、如何にしてなしとげられたかの歴史的考察を課題とした研究である。ここで、著者はまず、世親の思想的な特殊の立場が無著によつて大成された唯識學説を繼承しつつこれを簡單にし、その思想を全般的に整備統一し、さらに、反唯識思想を論破して唯識學説の地位を確保するといふ、唯識學説の完成者としての立場であるとするとする。そして著者は、大乘百法明門論が唯識學説の簡單化をあらわす論書であり、唯識三十頌が唯識學説を整備統一する論書であり、唯識二十論と大乘成業論とが反唯識思想を論破して唯識學説の地位を確保する論書であると見做し、これら四つの論書を源流となる歴史的な背景思想をさぐりつつ研究解釋し、これらの論書の上に世親唯識が如何にして形成されたかを客觀的に説明しようとして形成している。したがつて、先の資料論もさることながら、特にこの歴史論では、解深密經、瑜伽論、攝大乘論、俱舍論などの數多くの關係諸文獻をもつて考證する著者

の唯識學に對する蘊蓄が披瀝されており、努力の程が偲ばれる。著者の方法は、關係諸文獻を殆んど漢譯で讀んでおられるから、純粹にインド學的ではないが、訓詁的な法相宗義學的解釋とは異つた批判的な歴史的方法であるだけに、思想史的にはなほだ有意義であり、唯識學研究に新しい領域を示されたものであるといつてよい。三十頌、二十論、成業論の如き簡潔に思想を整備した難解な論書に對しては、著者の如く背景思想をさぐるといふ歴史的方法を採用することが、なんとしても必要である。この點、本書は唯識學研究に缺くことのできな参考書とならう。

しかし、著者の方法が純粹にインド學的でないだけに、關係諸文獻の取り扱ひについて、識者の間に異論の出づる點もあるのではないかと思ふ。紹介者が一讀した所でも、同感しえない點が二、三にとどまらない。しかしながら、われわれは、本書が著者積年の勞作であり、唯識學研究として現今の學界に貢獻することすこぶる多大なる業績であることに對し甚深の敬意を表したい。(三十年一月刊

A5五三七頁、一〇〇〇圖、東京、青山書院) (安井)

#### ◇ 華嚴教學の研究

坂本 幸男著

著者坂本博士はその三十餘年の歲月を只管華嚴教學の究明に沈潜して來られ、既に雜誌論集にも幾多の業績を發表せられてゐるが、本書は博士の學位請求論文をはじめ十數篇の論文を纏めて公にしたもので二部に分たれる。

##### 第一部 慧苑の華嚴教學の研究

慧苑は賢首大師法藏の高足の弟子としてその俊才を謳はれ、師の歿後、その未完の遺著新經略疏を補つて刊定記を製作した。而るにその製作に當つては師説を刊り自己の新定を加へる點が多かつたので、澄觀は之を背師異流として鋭く攻撃し、後世の學者又すべて痛烈な非難を浴せ、相承の系譜から之を除外してゐる。

著者は曾て國譯一切經中の探玄記を擔當するに當つて多くの章疏を具に比較検討し、その結果慧苑の刊定記が餘りにも不當に低く評價せられてゐるのを痛感し、爾來多年、之が是正を念願して慧苑教學

の究明に努力せられた。この第一部はその研究成果である。その中先づ第一章翻法寺慧苑の傳記 (pp. 5-57) に於てはその經歷、著作、門下にわたつて細く攻究し、その在世年代を六七三—七四三、世壽を約七十歳と推定すると共に、華嚴教學の傳統は事實上、法順—智儼—法藏—慧苑—法說—澄觀と傳承せられてゐることを論證する。次に第二章以下は、慧苑の教學大系が最も組織的に述べられてゐる刊定記初の十門開説を資料として採り上げ、之に依て論が進められる。すなはち第二章慧苑の教學に對する論難とその吟味は十門開説の次第に筆を起して隨疏演義鈔に擧げる刊定記破斥の十種の理由を紹介して澄觀の慧苑に對する論難を概観し、之を吟味批判し、次いで十門の第一教起所因について論を進める。次に第三章華嚴經と三藏二藏十二部經との關係 (pp. 111-148) は第二藏部所攝を第四章諸教判に對する慧苑の批判 (pp. 149-265) は第三顯教差別の三門中、一教、異説と二、辨順違を、第五章慧苑の四種教判論 (pp. 266-300) は顯教差別中の三顯正義を夫々素材として取扱つてゐる。慧苑に對す